

《論文》

ライフセービングにおける オーラルコミュニケーションについて

立川 和美, 稲垣 裕美, 小峯 力

Oral Communication in Lifesaving

Kazumi TACHIKAWA, Yuumi INAGAKI, Tsutomu KOMINE

キーワード：ライフセービング, オーラルコミュニケーション, 会話の公準

Key Words: lifesaving, oral communication, maxim of conversation

要旨

ライフセービング活動におけるライフセーバーの言語活動については、その対象は多様であり、特にオーラルコミュニケーションが重要な役割を果たしていることが考えられるが、これについての体系的な研究は今まで行われてこなかった。そこで本研究では、まず、医療活動におけるコミュニケーションの先行研究を概観することで、ライフセービングへの応用を探り、さらにレスキューでの言語活動について、Grice (1989)などを援用して、語用論の観点から考察を行った。その結果、ライフセービング活動におけるレスキューの現場では、音声言語による明確な伝達行為や、位相、ポライトネスに配慮した言語活動、更に日常会話以上に「会話の公準」の遵守などが求められることが明らかになった。また、ライフセービングでは、一般の談話に比べて、受信者志向の態度が強く認められるという特徴も見られた。

1. はじめに

ライフセービングでは高度の専門技術に加えて、幅広い知識が必要とされるが、これがオーストラリアで発達したスポーツであることから、たとえば海流や波、高潮や危険な海洋生物など、その大部分の術語（テクニカルターム）が英語の専門用語で構成されている。

またこの活動では、水辺の事故防止や一時救

命処置が行われるが、その現場は海浜のみならず、川や湖沼、プールなど広い範囲にわたる水辺の場所がカバーされる。そして、その活動を通じて接する対象は、性別、年齢が多様で非常に幅広いという特徴を持っている。

さらに、ライフセービングの活動はその目的が人命救助にあることから、迅速かつ正確に意思伝達を図ることが極めて重要とされる。そしてこうしたコミュニケーションは、ライフセー

パーと意識のある被救助者との間だけでなく、セービングチーム内での意思疎通もあるため、言語能力の充実はライフセーバー育成の現場において不可欠な要素だといえるだろう。

現在、ライフセービングの分野では、コミュニケーション活動に着目した研究は特に行われておらず、コミュニケーション能力育成に特化したトレーニングメニューや、指導の方法論についても、議論が十分とはいえない状況にある。しかし、ライフセーバーとしてのコミュニケーション能力をつけるための実践は急務の課題であり、こうした領域の研究は求められている。

また、このテーマに関係する先行研究としては、応用言語学の視点からの医療におけるコミュニケーション能力に関する議論がある。そこで以下、これらも踏まえ、ライフセービングのオーラルコミュニケーションについて考察を進めていく。まず、サーフレスキューに見られるコミュニケーション活動についてとりあげていきたい。

2. ライフセービングにおけるサーフレスキュー活動について

本章では、日本ライフセービング協会編(2008)を参考に、サーフレスキューの方法や分類をまとめておきたい。

2. 1. ライフセービングの用語—サーフ技術とレスキュー器材を中心に—

本節では、日本ライフセービング協会編(2008)¹⁾に提示されているいくつかのテクニカルタームをまとめていく。

サーフスイム技術

① ウエーディング：膝から腰くらいの水深の

ところで早く進むための技術。

- ② ドルフィンスルー（ダイビング）：水の抵抗を少なくして波を切りぬけながら進むための技術。
- ③ ヘッドアップスイム：海では水底にライン等の目印がないので、ときどき頭をあげて自分の位置や波の状態を確認しながら泳ぐ。
- ④ ボディサーフィン：沖から早く岸に戻るときに器具を何も使わずに波に乗る技術。

ボード技術：ボード操作

- ① バニーホップ
水深がボードを抱えて走るには深く、パドルリングするには浅いところでは、ボードのレール（両面）を両手で保持し、両足でジャンプしながらボードを進ませる。
- ② パドルリング
ボード上に腹ばいになり、両腕をクロールのように交互にパドルリングするストロークパドルと、ボード上に両膝をつき、両腕で同時にパドルリングするニーリングパドルがある。

波越え操作

波越え（スープ越え）については、次のように説明されている。

スープ（波が立ち崩れ始めたら）ボードのノーズ（先方）を波に対して垂直方向に向ける。ストロークパドルの場合、ボードのレール（横面）を持って上体を起こし、自分の身体とボードの間にスープを通すようにして波の抵抗を少なくするとよい。また、ニーリングパドルの場合、スープを越える直前に上体を起こし、スープを越えると同時にパドルリングしながらバランスをとるとよい。

レスキュー器材とその用途

レスキューチューブやレスキューボードの他、動力を用いたレスキュー器材としてIRB（インフレーターレスキューボート：船外機エンジン付き救助用ゴムボート）とRWC（レスキューウォータークラフト：救助用水上オートバイ）がある。その他の器材としては、リングブイ、スローロープ、レスキューキャン、ウォーターパークチューブ、ローボートなどがある。

2. 2. レスキューの方法

レスキューは大きく分けて以下の3つのタイプがあり、「リーチ」から「スイム」までの方法は、溺者に対してアプローチ（接近）することを主な目的とするものである。

- ①トーク・リーチ・スロー：水に入らない・泳がない
- ②ウェイド・ロウ：水に入る・泳がない
- ③スイム・トウ：水に入る・泳ぐ

これらレスキュー方法の具体的な方策は、次の通りである。

トーク（talk）：陸上から溺者に向かって声をかける方法。

リーチ（reach）：陸上から自らの手足を溺者に差し出して救助する方法。

スロー（throw）：陸上から水に浮かぶ物やロープを結びつけた物を溺者に投げ入れて救助する方法。

ウェイド（wade）：歩いて溺者に近づき、救助する方法。

ロウ（row）：ボートやサーフボードを使って溺者に近づき救助する方法。

スイム（swim）：泳いで溺者に近づき、救助す

る方法。

トウ（tow）：溺者を確保したまま泳いで引っ張って安全なところへ移動させる救助方法。

実際のレスキュー活動においては、「安全：レスキュー自身と溺者の安全確保（二次事故の防止）」、「確実：確実なレスキュー方法の選択」、「迅速：速やかなレスキュー」の3原則に沿い、状況を把握した上で適切な方法がとられる。さらに、レスキュー方法の選択の基準については、以下のようなものが挙げられている。

溺者の状態（単数か複数か、意識の有無）

溺者の距離（位置）

海の状態（波の有無、水深、潮の流れなど）

アシスタント（応援者）の有無

救助器材（何があるか、他に利用できるものがあるか）

次節では、様々なレスキューの種類について考えていきたい。

2. 3. レスキューの種類

本節では、器材を用いたレスキューや、複数のレスキューアーによるレスキューについてまとめる。

まず、ボードレスキューでは、レスキューボードが使用され、以下のような流れで行われる。

発見

→ボードで接近

→声掛けと観察

→意識なし：溺者の手を握る

→人工呼吸・応援要請

意識あり：→ボードを差し出す

→ボードに載せる

→浜に戻る

→(意識なし)心肺蘇生+AED

次に、チューブレスキューでは、レスキューチューブが使用され、意識がない場合は、以下のような流れで行われる。

発見

→チューブで接近

→声掛けと観察

→チューブを持つ

→溺者の手を握る

→チューブを巻く

→人工呼吸・応援要請のサインを出す

→浜へ戻る

→心肺蘇生法・AED

また、複数の溺者が同時に発生した場合のマスレスキューでは、複数のレスキューアーが連携して救助を行うが、この場合、コミュニケーションを十分図ることで二次事故の防止が図られることから、言語活動が重要な役割を果たす。たとえば確保においては、「レスキューボードのストラップをしっかり握る」、「ノーズ側の手でストラップを握る」といった指示や、不安を取り除き落ち着かせるといった安心を促す声かけ等が行われる。

その他の搬送の方法として、レスキューアー2名で搬送するツーマンドラッグでは、レスキューアーは常にコミュニケーションをとりながら、溺者を持ち上げ、搬送、おろして寝かせるという一連の活動を行う。これは、やはりレスキューアー2名で行うツーマンキャリアやツーハンドシートキャリア、さらに3名で搬送するスリーメンキャリアについても同様である。

2. 4. ボードレスキュー・チューブレスキューにおける言語活動

本節では、ボードレスキューとチューブレスキューにおける言語活動について整理する。

*ボードレスキューにおける言語活動

溺者の意識がある場合、レスキューアーは溺者に声の届く距離になったら直ちに声をかけ、ボードのノーズが届くまで、落ち着かせることを目的とした声かけを続ける。その後、腹ばいの体勢でボードに乗るように声をかける指示を出して確保し、浜へ戻る際には、溺者がパドリング出来る状態であれば、コミュニケーションをとりながら、ともにパドリングを行う。

このように、常に溺者との接触を声かけを続けながら行うことが、特徴である。

*チューブレスキューにおける言語活動

まず、レスキューアーは溺者から2メートルくらい離れたところで、溺者の状態を観察しながら声をかけて、落ち着かせる。次に溺者にチューブにつかまるように声をかけるが、溺者はパニックや恐怖におびえている場合が多いため、ある程度の距離を保ったまま観察し、声かけによって安心させる。チューブを渡したら、溺者がパニックを起しているのか、怖がっているのかを判断し、その状況に応じた内容で話しかけ、溺者が落ち着いたところで、両脇の下にチューブを抱えながらつかまるよう指示する。その後、浜へ戻るが、溺者に余裕のある場合は、あおむけでバタ足をしてもらうように指示する。

この他、チューブレスキューのアシスタントでは、進行方向の調整を図るため、レスキューアー同士、十分なコミュニケーションをとる必要がある。

以上のように、ボードレスキュー、チューブレスキューのいずれにおいても、まず第一に溺者の状況を正確に把握し、それに合った声かけを行うという柔軟な対応が必要とされている。

3. ライフセービングと コミュニケーション

3. 1. 言語学から見たコミュニケーション活動

言語学におけるコミュニケーション研究の中心的領域は、言語表現と使用者、さらに文脈との関係を論じる語用論である。これは、J.L.AustinやJ.Searleの「発話行為」の研究に始まり、P.Griceの「会話の公準」に受け継がれ、近年では、D.Sperber&D.Wilsonによる関連性理論の枠組みが発表されている。以下、この領域において本研究と関わる点について、概観しておきたい。

Austinは、言語表現が命令や依頼、約束などの機能を果たすことに注目し、それをを用いること自体で何らかの行為が実行される動詞を遂行動詞と呼び、話すこと自体を発話行為、それによって行われる行為を発語内行為、さらに間接的に引き起こされる行為を発語媒介行為とした。

Grice (1989)²⁾ は、コミュニケーションは発信者と受信者との協調 (cooperative principle) によって成立すると考え、その基本となる4つの会話の公準 (maxims of conversation) を立てた。その詳細は、以下のとおりである。

- 1 量の公準 (maxim of quantity) : 求められているだけの情報を提供しなければいけない。
- 2 質の公準 (maxim of quality) : 信じていないことや根拠のないことを言うてはいけない。

3 関連性の公準 (maxim of relation) : 関係のないことを言うてはいけない。

4 様式の公準 (maxim of manner) : 不明確な表現や曖昧なことを言うてはいけない。

但しこれらは、実際の日常会話ではしばしば逸脱も見られる。たとえば「この近くに銀行はありますか」という質問に対して、関係性の公準を破り (Yes/Noの形式で答えず)、銀行への道順を答えるといった会話は、日常的に発生している。しかし、ライフセービングの「トーク」の現場ではこのような逸脱は避けられ、むしろ厳密に遵守されるべき要素であるということに注意したい。正確で適切な表現を要求されるレスキューの現場においては、臨機応変な言語対応も必要ではあるが、厳格な公準の遵守こそが迅速なレスキューに直結し、効果的に作用すると考えられるからである。この点から、発信者としてのレスキューアがこうした4つの公準を理論的に理解していることは、重要だと考えられる。

3. 2. 医療におけるコミュニケーション教育の先行研究

コミュニケーション能力をつけさせる教育は、この活動が個性や主観と深く関わることから、どのような専門領域においても、必ずしも容易とはいえない側面を持っているが、ここでは最初に、看護現場におけるコミュニケーションの研究をいくつかとりあげる。井上他 (2004)³⁾ では、看護現場での英語と手話の必要性についてのアンケート (愛知県内の5か所の病院) を通して、看護における言語教育のありかたを検討している。そこでは、「看護現場で働く人々がコミュニケーションの手段としてさまざまな

言語を使う必要」が増加しているため、看護現場で実際に必要な言語やそれを使用する場面、またその効用を調査することで、「日本の看護事情に即した看護英語教育の充実を図」ることを目的としている。この結果として、現在の看護の現場ではさまざまな言語が必要とされているが、とくに英語については緊急性が高いことが結論づけられている。

また廣瀬他(2011)⁴⁾は、「学生のコミュニケーション能力向上を目指す場合、明確な定義に基づき社会的スキルやコミュニケーションスキルを測定する尺度の開発、学生の社会的スキルの実態に関する基礎研究が不可欠」だと考え、155名の看護学生を対象にコミュニケーション活動に関する調査を行い、その結果、因子尺度として、以下の4つの因子を認めている。

「状況に沿った行動」=場面を的確に判断し、状況や相手に配慮した言語行動をとることに関わる。

「かかわり行動」=相手の話を傾聴する姿勢と相手に対する自分の意思を示すことに関わる。

「集団への参加」=集団の中で自分の役割把握や主張ができることを示す。

「人への関心」=看護師のコミュニケーションとして重要な患者への関心を示す。

次に医療現場の研究として、住大(2005)⁵⁾は、発信したメッセージの半数以上は、「話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との距離の取り方」といった非言語的な情報伝達によって行われているとし、これは発信者の印象や受信者

との関係を示す他、「ことばの代替、補足、強調、否定、調整」の機能を持っていると指摘する。さらにコンテキスト依存度が高い日本語話者のコミュニケーションでは、「非言語的な情報が敏感に感じ取られる」とする。

ライフセービングにおいても、手足の動きや相手との位置、姿勢、顔の表情などが、レスキューでの重要な非言語コミュニケーションツールとなると考えられる。そこで日本人ライフセーバーには、日本人溺者がこれらの要素に特に敏感に反応する可能性が高いことを前提とした、慎重な行動が求められるといえるだろう。

さらに住大(2005)では、発話の際の発声のしかたや口調を示すパラ言語については、音声的要素を中心に、発話内容のイントネーションやアクセント、さらにフィラーの在り方などの研究が既に見られると紹介し、具体的には、医療のディスコースにおける話す速度について、早ければ専門性の高さを示して聞き手が内容に賛成するという研究と、遅ければ信頼性を示して、説得の効果が高いという研究を提示している。ライフセービングでは、不安を抱えている人に大声で早口に話すことによって、ライフセーバーの印象が低まったり、溺者がパニックを増大させたりする可能性があることが予想されるため、パラ言語の研究はライフセービングのディスコースとしても必要である。

加えて、「医療従事者同士で簡潔、正確な伝達のために使用される専門用語の多くは患者に通じないため、語彙の説明や言い換えが必要になることがある」とあるが、これは高度の専門用語を多く含むライフセーバーの世界でも、共通の課題と言えよう。

この他、一般のディスコースに関する先行研究で指摘されている言語的要素として、スタイ

ルの問題がある。ライフセービングのコミュニケーションにおけるスタイルについては、例えば敬語では「親しさと丁寧さ」とが共有されることが必要であるし、方言を話すことが望ましいケースもある。これは、レスキューが溺者等と同じ方言を使用することによって、和やかな雰囲気や親しい関係が構築されることにつながるため、全般的に、社会階級や男女、年齢等に由来する位相については、十分な配慮が必要である。たとえばレスキューする相手の年齢に合わせた言葉づかいとして、子供に対しては「だいじょうぶだよ。がんばろう」、大人に対しては「大丈夫ですよ。頑張ってください」というスタイルのスイッチングは、一見、簡単なことのようにであるが、コミュニケーション活動によって発生する精神的なレスキューの効果を待つ要素だといえるのである。

4. ライフセービング活動でのコミュニケーション—他のスポーツ競技との観点から—

本章では、ライフセービングにおけるコミュニケーション活動全般について、広くスポーツ競技のコミュニケーションと照らし合わせながら考えていきたい。

コミュニケーションスキルの研究については、スポーツ競技の領域での先行研究が多々見られる。たとえば、コミュニケーションスキルの育成では、発信と受信とのバランスが求められるが、特にスポーツ競技では「相手の心理の読み」といった受信力が重要な役割を果たすことが指摘され、これはライフセービングにおいてもあてはまることである。

またコミュニケーション能力は、成長過程に

おいて、社会との関わりを通して段階的に獲得されていくが、近年、その在り方は多様化・複雑化しており、現代社会において円滑なコミュニケーションをとることは必ずしも容易ではないとされている。そうしたことへの対応策の一つとして、ライフセービング教育に取り入れられている「パディシステム」は、コミュニケーション力の育成に有効だといえよう。

ところで、コミュニケーションスキルは、大きく言語と非言語に分類されるが、スポーツの場面では、しばしば、非言語スキルとしてのアイコンタクトやジェスチャーなどが活用されている。さらに、チーム内での情報伝達においては、信頼関係が高まることで非言語的コミュニケーションの量は増える傾向がある。しかし、ライフセービングの場では、そうした非言語要素とともに、「相手に確実に伝達する」ための言語要素も極めて重要であることに注意したい。非言語的コミュニケーションが増えることは迅速な伝達を可能にするが、ライフセービングの場では、わずかでも相互理解にずれが生じれば、大きな事故につながりかねないからである。

また、ライフセービングでは、全く面識のない相手に積極的に声をかけ、コミュニケーションをとろうとするといった、極めて高度の技術が必要とされる。これは、他のスポーツと異なるコミュニケーション技術であり、この領域に求められる特徴的な言語要素だといえる。

次に、実際の指導現場で使用されているライフセービング教育のテキストで指摘されているコミュニケーションについて示しておきたい。ここでは、Surf Life Saving Australia Limited (2004)⁶⁾を用いて、その内容を概観する。まず、具体的なコミュニケーション内容に関しては、効果的なコミュニケーション (Effective

communication) として、以下のように示されている。

Effective communications giving and receiving information in a way is clear and easily understood by both the communicator and receiver. Effective communication is one of lifesavers' greatest skills.

Communication is used to send and receive messages in a variety of forms and for a lifesaver these skills help them to save lives, inform and to educate.

このようにライフセービングの質の向上のためには、発信と受信との双方向的コミュニケーション活動が不可欠である。さらにライフセーバーとして活用すべきコミュニケーションスキルについては、以下の7項目が示され、単に音声言語のみならず文字言語にわたるスキルの重要性が指摘されている。ライフセーバー養成の中では、「話す、聞く、読む、書く」といった言語の4技能をバランスよく育成していくことが求められているといえよう。

- * performing rescues, alone or in a team;
- * informing members of the public about dangers and safety;
- * working with other safety organizations and emergency services;
- * educating and informing others;
- * completing documentation;
- * learning new procedures;
- * working as a member of a team.

さらに状況によって、コミュニケーション様

式が変化し、その場面に応じた言語活動が必要となること、またそこでの基礎的な要素にもふれられている。すなわち、「何を、誰に、どのように」して伝え、情報を受け取るのかを明確化することが求められるわけである。

To communicate effectively we have to match our language to the situation. We need to clearly work out:

- * the *purpose* of the communication (what?)
- * the *audience* of the communication (who?)
- * the *best form* of the communication (how?)

このようにコンテキストに十分配慮することは、言語活動を行う上で基本的な事項であるが、そうした原則は、日常的な言語活動では特に意識されることはないことに注意したい。よって、これらを意識化することにより、コミュニケーションの効果は高まることが期待される。

次に、ライフセービングの現場におけるコミュニケーションの実際について考えたい。ここでは音声言語に特化して議論を進めていく。

Spoken and verbal communication

When communication verbally as a life saver you will:

- * exchange information—you might ask questions for clarification about an incident, or give instructions/explanations to a member of the public.
- * concentrate on important ideas and supporting points such as those given in training session.
- * participate in open-ended discussions to clarify issues or solve problems.
- * listen to spoken presentations and briefings

or explanations, such as a patrol captain's briefing at the start of a patrol.

事故が発生した場合、その詳細を明らかにすることや、問題解決のために、常に相手に対して開いた態度で臨むことなどが示されている。ここから、本稿の3.1.で述べたグライスの理論でみられたように、簡潔にして明確な内容を発信するという「会話の公準」に則った姿勢を持つべきであることは、明らかであろう。さらに専門技能を持つライフセーバーが、一般の人々で行うコミュニケーション活動で気をつけたいことについては、以下のように示されている。

Barriers to communication

There are many barriers that get in the way of effective verbal communication. We can help recipients of our spoken communication by recognizing and avoiding barriers.

* make sure background noise does not prevent then hearing the message—for example, crowd noise, waves, outboard motors.

* use language appropriate to their language skills and understanding and use other methods of communication if necessary (i.e. English as a second language, don't use jargon).

海辺でのコミュニケーションには、雑音が入ることなどが想定される他、専門用語を用いない、また使用言語についても母語話者ではないものには俗語などは使用しないといった配慮が必要とされる。特に、後者については、伝達すべき内容や、相手に十分に注意し、「わかりやすく」伝えることを念頭に置くことで、コミュ

ニケーションの障壁を取り去ることは可能だといえよう。

5. おわりに

本稿では、ライフセービングにおけるオーラルコミュニケーションについて考えてきた。

冒頭でも述べたが、ライフセーバーの言語活動の対象は多様であるため、それだけ高いコミュニケーション技術が求められる。しかし、実際の現場において、ライフセーバーが危険行為に対する注意などを行った場合に、相手に対して反感をもったり、批判をしたり、場合によっては従わないようなケースも、皆無とはいえない。よって、ライフセービング活動でのコミュニケーションには、一般の談話以上に受信者志向の態度が求められる。

このようにライフセービング活動において、オーラルコミュニケーションは重要な役割を果たしているが、これについての体系的な研究は今まで行われていなかった。そこで本稿では、まず、ライフセービング活動に参考になると考えられる医療活動におけるコミュニケーションの先行研究を概観し、さらに、レスキューでの言語活動について、語用論の観点から考察を行った。その結果、ライフセービング活動におけるレスキューの現場では、他のスポーツと異なり、音声言語による明確な伝達行為や、位相やポライトネスに配慮した言語活動、「会話の公準」の遵守などが求められることが明らかになった。

今後は、レスキューにおける様々なオーラルコミュニケーションのタイプを言語学的な見地から検討し、ライフセーバー養成という教育現場への還元を目指した研究を進めていくことが

課題である。

参考文献一覧

- 1) 日本ライフセービング協会編 (2008) 『サーフライフセービング教本』 大修館書店
- 2) Grice, H.P. (1989) *Studies of the Way of Words*. Harvard University Press.
- 3) 井上真紀・佐藤俊哉・片岡由美子・原大介・神田和幸 (2004) 「看護の現場で必要とされる言語についての調査と分析」『中京大学論叢』45 (1) 129-154
- 4) 廣瀬春次・太田友子・井上真奈美・中村仁志 (2011) 「看護学生のコミュニケーション活動に関する研究」『山口大学学術情報』4 47-53
- 5) 住大恭康 (2005) 「医師・患者コミュニケーションの諸相—医療コミュニケーションを検討するためのメモ—」『医事学研究』20 1-24 岩手医科大学
- 6) Surf Life Saving Australia Limited (2004) *Surf Life Saving Training Manual 32th Edition Revised*. Mosby.